



マリンコースト海上

ソニック達一行はホワイトアクロポリスで起こった事件をきっかけにストレンジャーたちの過去を聞いた。

世界の侵略が始まり、世界が崩壊する序章をソニック達は知った。

そして、ストレンジャー、アルドールが四神の青竜、朱雀の一人であることも。

「これからどうするの？ スtrenジャー。」

アルドールはテイルスが運転するカレントで聞いた。

「侵略軍が本格的に起動を始めたのなら、俺はその侵略を阻止しつつ、テトラクリスタルアイランドの場所や情報を収集するつもりだ。」

「そうすると私達だけでは戦力が足りないわね。」

「ピスフリーやジョイも探さないと。」

ストレンジャーとアルドールは少し考えつつ俯く。

「心配すんなストレンジャー、アルドール」

ソニックが不穏なムードを切って言った。

「俺達だっているじゃないか。」

「そうだ、お前達だけで抱え込むなって。」

「そうよ。私達だってやれるだけのことはするわ。」

ソニック達は口々にそう言った。

「世界とストレンジャー達の危機だもんね。」

運転しているテイルスも言った。

「すまない、ソニック、テイルス、ナックルズ、エミー。」

「ありがとうございます。」

ストレンジャーとアルドールは感謝しながらそう言った。

カレントは数時間6人を乗せ、ミスティックルーインへと運んでいった。

ミスティックルーイン テイルスの工房 メカエリア

「とにかくいろいろと情報を集めないと始まらないね。」

テイルスはカレントを入れたメカエリアのゲートを封鎖するスイッチを押しつつ言った。

「でも俺達は空を飛ぶすべが無いし、ストレンジャーだけで偵察するにも島の場所が特定できないじゃな。」

「何か突破口を取らないと ね。」

6人はメカエリアと工房をつなぐ道を進行しつつ、作戦を考えていた。
だが肝心な情報が何一つ無く動くにも動けずにいた。

「まずは侵略を一つ一つ防いでいくしかないわね。」

「防いでいるうちに何か情報が得られるかもしれないからな。」

「とりあえず、全員がいっしょにいるしかないね。」

先を歩いていたテイルスがマンホールの蓋を開けた。

「さて、まずは侵略の妨害と決まったけど、」

「どこを見ていけばいいかな。」

「とりあえず、俺が外を見るのついでにあのときの武器を取ってくるよ。」

ストレンジャーが提案した。

「クリスタルで出来たあの武器？」

「ああ、まずは武器が無いとな。さすがに装備無しじゃ、何も出来ないから。」

「確かにな。でも一人で大丈夫か？」

「大丈夫だ。じゃあとりあえずいってくるぜ。」

ストレンジャーは工房を出て行った。

テイルスは窓からストレンジャーが飛んでいくの見届けていた。

「ああは言ってたけど、やっぱり心配ね。」

エミーがイスに座りつつ呟いた。

「ストレンジャーは皆に迷惑をかけたくないのよ。昔分かれる時も涙を見せなかったから。」

アルドールはそう言った。

「とりあえずストレンジャーが帰ってくるのを待とうよ。」

「そうだな。武器があればそれなりに手が出せるからな。」

ソニック達はストレンジャーが帰ってくるのを待っていた。

ストレンジャーが出て行って数時間・・・

外は日が傾き始め少し夕日に染められていた。

「さすがにちょっと遅すぎない？」

「そうだな。もう3時間はたつぜ。」

ソニックは壁に掛けられている時計を見て言った。

「確かトロピカルアイランドまでストレンジャーだと30分近くで付くはずなのに。」

窓の外を見ながらテイルスはそう呟いた。

「何かあったのかしら・・・」

「とりあえず見に行ってみようぜ。」

「でもどうやっていくんだ？ あそこは渦潮&強風でメカじゃ無理だぜ？」

「あっとそうだったな。」

ソニックの意見にナックルズは頭をかきながら言った。

「なら、私がどうにかしましょうか？」

不意にアルドールがそう言った。

「アルドールが？ 一人じゃ俺ら3人を運ぶのは無理だろ？」

「いいえ、大丈夫です。この羽があれば。」

そういうとアルドールは腕から生えている羽を取った。

「この羽をどうするの？ アルドール。」

「とりあえずソニックさん。この羽を持ってください。」

アルドールの差し出した羽を、ソニックは受け取った。

「で、どうするんだ？」

「羽を持ったままジャンプしてみてください。」

「こうか？」

ソニックは真上にジャンプした。

「え！？」

「うそ！」

ソニックの現状を見てエミーとナックルズが驚いていた。

「ん？ どうした二人して。」

「ソニック！！ 浮いてるよ！！」

「え？」

ソニックは足元を見た。

ソニックの体は中に浮き、漂っていたのだ。

「マジかよ！？」

「すごいアルドール！」

「でもどうして！？」

「この羽は次期朱雀の後継者に生える羽なんです。コレを使えば、誰でも空を飛ぶことが出来るんですよ。効力は取ってから永久に。」

「すごい！！」

「じゃあコレを使えば俺達も飛べるのか！？」

ソニックはアルドールに言った。

「ええ、ナックルズさんもエミーさんも飛べますよ。どうぞ。」

アルドールは二人にも羽を渡した。

「でも下りるときはどうすればいいんだ？」

浮いているソニックはアルドールに聞いた。

「降りようと思うだけで下りれますよ。」

「おっと、本当だ。」

ソニックは再び地上に足をつけた。

「じゃあストレンジャーを探しに行こっか。」

「ええ。」

ソニック達は羽を持ってテイルスたち同様空を飛んで島へ向かっていった。

トロピカルアイランド

「ちっ！ ずいぶんとわいてくるじゃねーか！！」

ストレンジャーは小屋の前で大群の敵と戦っていた。

手には剣を持って。

「どこまで耐えられるかな？」

「うるさい！！ ファイヤーブレス！！」

ストレンジャーは敵を真っ二つにしつつ相手に火炎玉をぶつけた。

敵は次から次へと出てくる。

『このままじゃ拉致があかないな。どうするか・・・』

ストレンジャーは敵を相手にしつつ突破口を考えていた。

トロピカルアイランド近辺上空

「でもすげえなー まさか俺達が空を飛べる事が出来るなんてな。」

「本当、とっても気持ちいいわー」

ソニックとエミーはそう言った。

「喜んでもらえてよかったです。」

「あ、みんなトロピカルアイランドが見えてきたよー」

テイルスが前方を指差した。

まだ少し距離があるが島が見えていた。

「あれ？ 今一瞬島が明るくなかった？」

島を見ていたテイルスは、そう言った。

「え？ そうだったか？」

「私には見えなかったけど。」

「あれー？」

テイルスは首をかしげていた。

「とりあえず早く行ってみようぜ。」

ソニックは飛ぶスピードを上げた。

「あ、まってソニックー」

「置いてくんじゃねーよ。」

「もう、乙女を置いていかないでよね。」

テイルス、ナックルズ、エミーもスピードを上げて飛んでいった。

『皆さん、少し元気になってよかった。』

アルドールはそう思いつつ、スピードを上げていった。

「あ、みて！！」

ソニック達はエミーが指を指した方向を見た。
そこには敵に前方を囲まれたストレンジャーがいた。

「大変！！ ストレンジャーが！！」

「俺達も加勢しに！！」

シュッ！！

「え！？」

ソニックの前をすれすれで飛行機が飛んでいった。

「何だ！？」

飛行機はストレンジャーと戦っている敵目掛けて攻撃した。

バシバシバシッ！！

『何だ！？』

ストレンジャーは突然起こった砂埃を避けるために空へ飛び上がった。
プラズマショットは敵に命中し、敵が全部消えていった。

『とりあえず味方みたいだな・・・』

ストレンジャーは空を飛んでいる飛行機を見た。

「ストレンジャー！！ 大丈夫か！！」

ソニックはストレンジャーの元へ飛んでいった。

「ああソニック、俺は平気だ。 でもあれって。」

飛んでいた飛行機はスピードを下げつつ島に着陸していった。

「多分フォックスだよ。」

少し遅れて飛んできたテイルスはそう言った。

「フォックス？」

「うん。」

テイルスは飛行機の元へ飛んでいった。

「とりあえず行ってみるか。」

「ああ。」

ソニック達も着陸した飛行機の元へ

島に着陸した飛行機の元へ一番に着いたテイルス

「フォックスー」

「テイルス！ 久しぶりだな。」

テイルスがそういうと操縦席の窓が開き、フォックスが出てきた。

「フォックスどうしたの？ 確かもとの場所へ戻っていったはずなのに。」

「ああ、変な敵の電波をキャッチしたんでな。排除しに来たんだ。」

「そうだったの。」

「テイルスの知り合いか？」

少し遅れて島にやってきたストレンジャーがテイルスに問いかけた。

「うん。フォックスだよ。フォックス、あの人たちがこの世界に住んでる別の人たちだよ。」

「そうだったのか。敵は排除したんだが君、大丈夫だったか？」

フォックスはストレンジャーに問いかけた。

「ああ、オレには何も当たってないぜ。おかげで助かったよ。ありがとうフォックス。」

「いってコレくらい、えっと・・・」

「ストレンジャーだよ。」

「ストレンジャー。」

フォックスとストレンジャーは握手した。

「で、フォックスはこれからどうするの？」

一時ストレンジャーの家へやってきた7人

「とりあえずこの敵は排除したがまだまだこの星には同じ電波が出続けてるんだ。それを皆排除しちまわないとな。」

「その電波はどうやってキャッチしてるの？」

「アーウィンに備え付けてあるモニターに出てるんだ。」

「テイルス、そのモニターを応用して、どこに敵がいるか確かめられないか？」

ソニックはテイルスに提案した。

「うん、自分も同じ事を考えてた所だよ。その電波を収集できればどこにいるかもわかるし、最終的にはストレンジャー達がいた島も見つけられると思うんだ。」

「確かにいい案だな。じゃあ俺もテイルス達に協力するよ。」

「ありがとうフォックス。」

テイルスとフォックスは握手した。

新しくやってきた有能な攻撃主のおかげでいろいろと突破口が開けたソニック達。
戦いの始まりは今、切って落とされた・・・

— 続く —

初回の戦闘 風の谷

突如襲撃されたトロピカルアイランド

ストレンジャーが苦戦する中、突如やってきたフォックスとアーウィンのおかげで無事、敵を排除することに成功した。

侵略軍との攻防戦はまだ始まったばかりだったのだ。

ミスティックルーイン メカエリア

トロピカルアイランドから帰ってきたソニック達一行。

フォックスの乗ってきたアーウィンをしまうため、全員はメカエリアへやってきた。

「隔壁オープン！！」

メカエリアと海をつなぐ大きな隔壁が開けられた。

「フォックスー、いいよー」

「OK！」

テイルスはつけていたトレジャースコープでフォックスと通信し、アーウィン格納庫へしまった。

「テイルスってこんな大きな基地を持ってたんだな。すごいな。」

「そ、そんな事無いよー」

テイルスは尻尾を揺らし、ちょっとテレながら言った。

「さて、それじゃあ始めるか。」

「うん。」

テイルスたちは新しく設けた大きなスクリーン付きのメカの元へ。

「ちょちょいのちょいっと。」

テイルスはメカにシステムを入力した。

するとメカは起動し、モニターにレーダーが表示された。

「僕達がいる所はこの青い所だよ。それで、他の赤い所が侵略軍だね。」

「まずは近場からアタックしていくか。」

「そうね。でもどんな敵がいるかわからないのよね。」

「まあな、でもそれだけスリルと戦いがあるってことだな。」

「僕たちの進行に連れて多分敵も強化されると思うんだ。僕はここで指揮をとるよ。」

「ああ、頼むぜテイルス。」

「まずはどこが近いんだ？」

フォックスはテイルスに聞いた。

「そうだねー、まずはウィンディバレーからかな。」

「よし、そうと決まったらまずは準備だな。」

ソニック達は武器の置いてあるテーブルへ移動した。

「まずはそこまで無いからそれぞれ持っているもので挑もうか。」

「ソニックにはスピア、ナックルズにはハンマーを渡しておくぜ。」

「ああ、わかった。」

ソニックとナックルズはそれぞれ武器を手にした。

「フォックスは初期装備のブラスターとカウンターだな。」

「OK。」

「エミーは初期装備のハンマー、アルドールは扇と杖を渡しておくぜ。」

「わかったわ。」

アルドールは杖を手にした。

「じゃあテイルス、俺達行って来るぜ。」

「うん、僕はトランジーバーで皆に指揮を送るね、気よつけてね。」

「ああ、わかってるぜ。」

「よし、いくぜ！！」

ソニック達は最初の目的地であるウィンディバレーへ向かっていった。

『頑張ってね、皆。』

テイルスは心からエールを送っていた。

ウィンディバレー

ミスティックルーインから飛び出すこと数分。

ソニック達は侵略軍がいるウィンディバレーへやってきた。

『皆、もう目的地は見えた？』

通信機からテイルスがソニック達に聞いた。

「ああ、見えたぜ、状況はそこまで悪くはなさそうだが急がないとな。」

『侵略軍の勢力が大きいと思われるのは前に行った白の神殿からだよ。場所はストレンジャーが知ってるから。』

「じゃあそこが迎撃ポイントだな。」

「分かれていくか？」

ナックルズが提案した。

「ああ、戦力は分散した方がいいからな、集合場所は中心の風の吹き出し口だ。いいな？」

「OK！！」

「俺は左側から行くぜ。」

「じゃあ私も！！」

ソニックとエミーは島の左側へ向かっていった。

「じゃあ俺らは右側から行くぜ。」

「わかったぜ。」

フォックスを持っているストレンジャーは島の右へと向かっていった。

「じゃあ俺達は正面からだな。」

「わかりました、ナックルズさん。」

ナックルズとアルドールは正面から攻めることになった。

「よし、ここらでいいかな。」

ストレンジャーは陸地の近くでフォックスを下ろした。

「じゃあ行くぜフォックス。」

「ああ、オレからも頼むぜ。」

ガサガサ・・・！！

「早速来やがったな。」

前方の茂みから敵がやってきた。

「敵にしては感知が早いな。」

フォックスとストレンジャーは戦闘体制へ

「いくぜ！！！」

ストレンジャーとフォックスは前方の敵へ向かって突撃した。

「よし、この辺でいいな。」

「よっと。」

ソニックとエミーは海辺の陸地へ着地した。

「じゃあ敵を排除しつつ私達も行きましょう。」

「ああ、負けるわけには行かないからな。」

ソニックとエミーは島の中心へ向かっていった。

「ここらでいいだろ。」

ナックルズとアルドールはあぜ道の一角へ降り立った。

「敵はいないみたいですね。」

「ああ、だが安心は出来ないぜ。」

「はい、用心します。」

ナックルズとアルドールは、敵がいなかったことを確認し、島の中心へ向かっていった。

「とりやあ！！」

「破ッ！！」

一方、敵との攻防を続けているフォックス&ストレンジャー

「ちょこざいな！！」

敵は暴言を吐きつつ、二人を倒すべく接近していく。

「甘いな、ファイヤーブレス！！」

「食らえ！！」

フォックスはブラスター、ストレンジャーはブレスで敵を一掃していく。

「隙有り！！」

「！！！」

突如後方からやってきた敵がストレンジャーを襲う。

「覚悟！！」

「甘いな！！ とおっ！！！」

ストレンジャーを襲う敵めがけてフォックスはムーンサルトを繰り出した。

「助かったぜ、フォックス。」

「なに、コレくらいイイって。」

「ふう、コレでとりあえず全部見たいだな。」

「ああ、初回にしては結構強かったけどな。」

フォックスとストレンジャーは手に付いた砂埃を払いながら言った。

『二人とも、大丈夫？』

通信機を通してテイルスが話しかけてきた。

「ああ、大丈夫だテイルス、ソニック達の方は大丈夫か？」

『うん、皆まだ敵には会ってないみたいだよ。』

「了解だ、俺達も先を急ぐぜ。」

『気を付けてね。』

「ああ、わかってる。」

「大分時間を食っちゃったな。急ごうか。」

「ああ、でも急ぎすぎも危険だ、とりあえず歩いていこうぜ。」

「わかった。」

空を飛んでいこうとしていたストレンジャーをフォックスは制止させ、二人は歩いていくことにした。

6人はそれぞれ、島の中心へと向かっていった。

風の吹き出し口近辺

「ここだな。」

一番早くついたのはソニックとエミー。

「テイルス、ここでいいのか？」

ソニックは装着しているトレジャースコープからテイルスに問いかけた。

『うん、そこの近くにある洞窟に、風の吹き出しポイントがあるよ。そこの前で待ってて。後の4人も徐々に近づいてるから。』

「了解だ。」

「おお、ここだな、よおソニック。」

少し遅れてナックルズとアルドールがやってきた。

「あれ？ ストレンジャーは？」

アルドールは辺りを見渡ししながらソニックに問いかけた。

「いや、まだ俺達しか来ていないんだ。」

「そうなの。」

「もうすぐ来ると思うけどな。」

ソニックがそういうと後方から

ガサガサッ・・・

「え？」

「何??」

ソニック達は音のした茂みへ視線を向けた。

「ふう、ようやくついたな。」

「ああ。」

茂みからはストレンジャーとフォックスが出てきた。

「ストレンジャー、フォックス。」

「何だ驚かせるなよ。」

「あ、ゴメン。悪かった。」

『皆そろった？ソニック。』

スコープからテイルスがソニックに問いかけた。

「ああ、これで全員そろったぜ。」

『OK、じゃあそこからはストレンジャーが先導してくれる？』

「わかったぜテイルス、で、どこへ行けばいいんだ？」

『前にクロノアと行った白の神殿へ向かってくれる？ そこから敵の反応がでてるから。』

「了解だ。」

テイルスとの通進を終え、ストレンジャーがソニック達の方へ向きなおした。

「よし、じゃあ俺達も行こうぜ。」

「ええ、わかったわ。」

ストレンジャーとアルドールは風の噴出し口からでる風に乗って上方へ飛んでいった。

「俺達も行こうぜ。」

「了解だ。」

「行きましよ。」

「さっさと片付けちまおうぜ。」

ソニック達もストレンジャー達に続いて風に乗り、ウィンディバレーへ向かっていった。

—続く—

ウィンディバレー

ソニック達は最初の戦闘場所であるウィンディバレーへやってきた。
風の吹き出し口から出続ける風に乗って。

「ふう、ようやく付いたな。」

風の吹き出し口の出口へ一番早く着いたのはストレンジャー

「ここがウィンディバレーね。」

続々と出口に着いたソニック達がやってきた。

「ここが、ウィンディバレー。」

「でも風が無いわね。」

「おかしいな、前回着たときはすごい強風が吹いてたんだが。」

今回のウィンディバレーはなんと無風だったのだ。

『多分侵略軍の力で島がおかしくなってるんだよ。早くもとに戻さないと。』

「ああ、わかってるってテイルス。」

「で、本拠地の白の神殿はどっちなんだストレンジャー。」

ソニックはそれらしきものを探しつつストレンジャーに聞いた。

「まだここからじゃ遠いんだ。レールを走っていけばその近くまではいけるぜ。」

「じゃあここから歩いていくのか。」

「そういうことだ。」

「よし、じゃあ行くぜ！！」

ソニック達はレールの上を走って進んでいった。

しばらく進んでいくと。

「あ、あれかー？ ストレンジャー」

先頭を走っていたソニックが後方から付いてくるストレンジャーに聞いた。

「ああ、あそこだ。そこまでは飛んでいくんだ。」

「だが、一筋縄では行きそうにないぜ。」

ソニックは一時止まり、白の神殿を見た。

そこには侵略軍が大勢外で見張りをしていた。

「ちっ、見張りがいんのか。」

「どうする？、ストレンジャー」

アルドールはストレンジャーを見て言った。

「よし、じゃあ俺がアクアブレスで敵の注意を引くから、その際に皆は神殿の内部へ向かってくれ。内部は複雑な構造じゃないから迷わないと思う。」

「わかったぜ、ストレンジャー。」

ストレンジャーの提案にナックルズは同意した。

「私もいっしょにいるわ、ストレンジャー。」

「ああ、じゃあ頼むぜアルドール。」

「よし、じゃあ行くぜ！！」

ストレンジャーは走ってきたレールから空へ飛び立った。

「アクアブレス！！！」

ストレンジャーは巨大な泡と水泡を発射させ島の見張りの注意を引いた。

その際にソニック達は神殿の入り口に向かって飛んでいった。

バシャバシャッ！！

「なんだなんだ！！？」

「敵だ！！！」

白の神殿の外を見張っていた侵略軍はいっせいに集まってきた。

水玉の着地地点にストレンジャーとアルドールがいた。

手には剣と杖が握られていた。

「さあ！！」

「ショウタイムよ！！」

「かかれ！！！」

ストレンジャーとアルドールは大量の敵を相手に向かって行った。

その際に神殿へ侵入したソニック達は奥へ走っていった。

「ここが大広間か。」

ソニック達は敵に邪魔されること無く神殿の奥へやってきた。

「あ、みてソニック！！」

エミーは奥の台座を指差した。

台座には大きな黒真珠が乗っていた。

「これ。」

「テイルス、コレが発信源か？」

ソニックは目の前にある黒真珠を前にテイルスへ聞いた。

『うん、ソニックの前にあるのが大きな発信源だよ。それを破壊してくれる？』

「了解だ。頼むぜナックルズ。」

「ヨッシャ！ 行くぜ！！」

ナックルズは手にしていたハンマーを大きく振りかざした。

「オラッ！！」

ガン！！！！

「固ッ！！」

ナックルズは両手で持っていたハンマーを片手で持ち、多少痛む手を振りつつ言った。

「おい、全然びくともしてねえぜナックルズ。」

「マジかよ！！」

ナックルズは自分が叩いた真珠を見て驚いていた。

『どうしたの皆？』

「ナックルズがハンマーで思いっきり叩いたんだが全然びくともしないんだ。」

『嘘！？ その剣やハンマーはダイヤモンドじゃなければ全部壊れるはずなのに！』

「そんなに強度があるようにはみえねえけどな。」

ソニックは黒真珠を見つつ言った。

「こういうのはやっぱりストレンジャー達じゃないとダメなのか？」

「そうだとしたらストレンジャーを呼ばないと。」

「じゃあ加勢しに行くか！」

「ええ、行きましょソニック。」

ソニックとエミーは入り口へ向かって走って行ってしまった。

「お、おい！ オレを置いていくな！！」

ナックルズとフォックスもソニック達の後を追いかけていった。

「破ッ！！」

「それっ！！」

ストレンジャーとアルドールはそれぞれ正面の敵を倒していた。

「やっぱり敵が多いな。」

「ええ、これはなかなか終わりそうに無いわね。」

ストレンジャーとアルドールは背中同士で言った。

「ストレンジャー！！ アルドール！！」

「私達も加勢するわよ！！」

「おらおらおらっ！！！」

「邪魔はさせないぜ！！」

神殿から出てきたソニック達はそれぞれ近い敵をターゲットに敵へ向かっていった。

「ソニック！ ナックルズ！ エミー！ フォックス！」

「加勢があれば貴方達なんかに負けないわ！！」

ストレンジャーとアルドールも敵を排除するために向かって行った。

「ふう、コレで全部だな。」

「ようやく片付いたわね。」

ソニック達は手に付いた砂埃を払いつつ言った。

「で、ソニック。 中には何があったんだ？」

「中に奇妙な黒真珠があったんだけど。コレがまた厄介者でな。」

「黒真珠？」

「ああ、オレが壊そうとしたんだが壊れないんだ。ハンマーを使ってやったんだが。」

「で、ストレンジャー達なら何か知ってるかもってきたの。」

「確かにその真珠は奇妙だな。見に行ってみるか。」

ソニック達は再び、神殿へ向かっていった。

「コレだ、ストレンジャー。」

ソニックは台座に乗っている黒真珠を指した。

「コレが発信源なのか？」

「見たところ確かに普通の真珠ね。」

ストレンジャーとアルドールは近くでまじまじ見ていた。

「一応切ってみるか。」

ストレンジャーは持っていた剣で軽く黒真珠を叩いた。

パキッ！

すると真珠はなんととても簡単にヒビが入り切れてしまった。

「え！ マジかよ！！」

「ナックルズでも壊せなかった真珠が。」

「確かに変だな。俺なんかよりよっぽどナックルズの方が力があるのに。」

「何か違う点があるからかしら。」

アルドールは切れた真珠を拾い、また真珠を観察した。

すると、

キラッ！！

「え！？」

アルドールは急に光った真珠を放した。

手から離れた真珠はなんと黒から美しい綺麗な白の真珠へ生まれ変わった。

「真珠が！」

「すごい綺麗ー！」

エミーは落ちた真珠を拾って真珠に見とれていた。

「・・・なるほどな。ナックルズとオレとの違いはこれだな。」

「違いってなんだストレンジャー？」

ナックルズはストレンジャーに聞いた。

「多分すぐに切れた真珠と今浄化した真珠を見ると、俺達四神にしか浄化も切る事も出来ないってことだ。」

「なるほどな、確かにそれじゃあ、ナックルズでも壊せないってことか。」

『皆、反応が消えたんだけど何かあった？』

事が一段落したところでテイルスが話しかけた。

「ああ、黒真珠を破壊。 浄化をした所だ。」

「一応この真珠も持ち帰るぜ。」

『了解、じゃあとりあえず、ミッションコンプリートだね。』

「じゃあコレより帰還するぜ。」

ソニック達は真珠を持って白の神殿を後にした。

ミスティックルーイン メカエリア

「今帰ったぜテイルス。」

ウィンディバレーから戻ってきたソニック達はメカエリアへやってきた。

「お帰りみんな。ケガは無い？」

「ああ、俺達はなんてことは無いぜ。それよりこれ。」

ストレンジャーは持ってきた真珠を出した。

「コレが例の真珠だね。」

「ええ、何に使えるのかはわからないけど、とりあえず初期の情報収集のやくに立つといいんだけど。」

「それにしてもやっぱり綺麗だね。」

真珠を受け取ったテイルスも真珠をしばらく見ていた。

「俺達は次、どこへ行けばいいんだ？ テイルス。」

「僕も一通り近辺を見たんだけど、発信源が無くなっちゃったんだ。」

「そうなのか？」

ソニックはモニターを見に行った。

「確かにポイントが無いな。」

「うん。だからしばらく足止めだね。」

テイルスは持ってきた真珠をメカの上へ置いた。

すると

パッ！

「あ！ ポイントが出たぜ。」

真珠をモニター前のメカに置いたとたん、モニターにポイントが表示された。

「あ、本当だ！ でも突然出るなんてビックリだね。」

「まさかとは思うがその真珠のせいもあるんじゃないか？」

ストレンジャーは持ってきた真珠を見て言った。

「確かにコレなら、その可能性もあるな。」

「宝石同士が引き合ってるのかしら？」

エミーはたとえで言ってみた。

「確かに、そうかもしれないな。」

「まるでカオスエメラルドだな。」

「そうだね。」

「で、次はどこへ行くんだ？」

ナックルズもモニターの前へやってきた。

「えっと、次は、ホワイトアクロポリスみたいだね。」

「前に行った場所だな。」

「うん、そうだよ。」

「じゃあ、次はそこだな。」

次の目的地はホワイトアクロポリスへ決定した。

「でも行くとしたら明日だね。今日はしっかり休まないと。」

「よし、じゃあ今日は久しぶりにストレンジャーの手料理でも食うか！」

「お、それいいな！」

「賛成！！」

「わかったぜ皆。おいしいもの作ってやるよ。」

「あ、ストレンジャー、私も手伝うよー」

ストレンジャーの後をアルドールが追いかけていった。

「もしかしてアルドール。ストレンジャーに興味あるのかな？」

「確かに無いとはいえそうに無いな。」

ソニック達も続々とメカエリアを後にした。

人気が無くなったメカエリアで浄化した真珠が、差し込む光がないのにもかかわらず、輝いていた。

— 続く —

ミスティックルーイン

ソニック達はウィンディバレーでの戦闘を終え、テイルスの工房での夕飯を食べていた。今回のディナーももちろん、ストレンジャーが作ったおいしいディナー。7人はその後の一時を終え、床についていた。

「ZZZ z z z」

寝ている場所はそれぞればらばらだが、全員がすでに夢の中。だが、一人だけ夢の世界では無く現実世界にいる人が

「う、うーん . . .」

一人目覚めたのはストレンジャー。ソファで寝ていたストレンジャーだったが急に目が覚め、外へ。

『星が綺麗 . . .』

外は綺麗な星空と月が輝いていた。でもまだ深夜近くなので、明かりが無い。

『ピスフリーやジョイも、この星空を見てるのかな . . .』

近くの柵に背中を預け、ストレンジャーはそんな事を考えていた。

『会いたですか？ 昔の友人に。』
「！！！」

不意にストレンジャーの背後から声がした。

「誰だ！」

ストレンジャーは後に振り向き、声の主を探した。
だがそこには誰もいない。

「気のせいかな？」

辺りを見渡しつつ、ストレンジャーはそう言った。

『もう一度質問します。 会いたいですか？ 昔の友人に。』
「誰だ？ 姿を現せ！」

ストレンジャーがそういうとテイルスの工房の屋根から一つの人影が下りてきた。

「誰だ？ オマエ。」
『名乗るほどのものではありません。』

人影はそういった。

「さっきのことだが、どういうことだ？」
『そのままの内容です。 貴方の言う、ピスフリーとジョイに会いたいですか？ と、言うこと
です。』
「俺が会いたいと言ったらどうするきだ？」

名乗らない人影にストレンジャーは問いかける。

『会わせたいのは山々ですが、今は出来ません。』
「どういうことだ？」
『その二人は、もう少しすると貴方ともう一人が会うことになっています。ですが、彼らには
多少、危険が付いているのです。』
「ピスフリーとジョイがか？」
『その通りです。 自分が言えることは、彼らは今、ある場所であなた方を待っています。』

そういうと影は段々足元が消え始めた。

「さて！ どこで待っているんだ？」

ストレンジャーは消えていく人影に問いかけた。

『あなた方のいた、元の島で待っています。』

「テトラクリスタルアイランドにか？」

『もう一つ、貴方に忠告しておきます。』

影は完全に消える前に言った。

『そこにいるモノが、すべてではない事。 . . . それだけは、覚えていてください。』

「まで！」

人影は消えてしまった。

『どういう意味だ？』

ストレンジャーは消えた人影がいた場所を見ていた。

それから時間がたち、朝。

ソニック達もそれぞれで起床した。

「うーん、よく寝たー」

「ふああ、もう朝か。」

ソニック達は寝ていたベットから起きた。

「あ、ソニック、おはようー」

テイルスは自分が寝ていた寝室から出てきた。

「おうテイルス、おはよう。」

「おはようテイルス。」

「あれ？ スtrenジャーは？」

「まだ寝てるぜ。」

ソニック達はストレンジャーを見た。

「珍しいね。いつも早起きなのに。」

「確かにな。」

ストレンジャーはうつ伏せで寝ており、まだ寝息を立てて寝ている。

「起こす？」

「いや、寝てるんだ。まだいいよ。それより朝飯、何かあるか？ テイルス。」

「確か昨日のパンがまだあったと思ったけど・・・」

「じゃあそれで済ませちまおうぜ。」

ソニック達は昨日の残ったパンで朝食を取った。

ソニック達が起きてから一時間後・・・

「う、ううーん。」

「お、ようやく起きたな。」

リビングに座っていたナックルズが言った。

「おはようストレンジャー。」

「ああ、おはよう皆。」

眠気眼を擦りながら、ストレンジャーはいった。

「ストレンジャーにしては珍しいな。寝坊なんて。」

「ちょっと深夜に目覚めてな。皆もう朝ごはんは食べたか？」

「ああ、昨日残ってたパンでもう済ませちまったぜ。」

「そうか、わかった。」

「ストレンジャーの分もちゃんとあるよ。」

テイルスはキッチンから焼けたパンとバターが入ったバスケットを持ってきた。

「ありがとう、テイルス。」

ストレンジャーはテイルスからバスケットを受け取った。

「どういたしまして。」

しばらく時間が過ぎ、全員はメカエリアへやってきた。

「今日の目的地はどこだっけ？ テイルス。」

「今日はホワイトアクロポリスだよ。」

テイルスはメカエリアにあるモニターに出ているポイントの場所を言った。

「よし、じゃあ行ってくるぜ。テイルス。」

「行ってらっしゃーい。」

ソニック達は昨日同様、武器を持ってホワイトアクロポリスへ向かっていった。

ホワイトアクロポリス

「ようやく付いたな。」

ソニック達がミスティックルーインから飛び出して約1時間。

目的地であるホワイトアクロポリスが見えてきた。

「テイルス、大きな電波はどこから出てるんだ？」

『えっと、まだ場所は確定できない。敵がちょっと多くてポイントがバラバラなんだ。』

「だとしたら、少し敵を片付ける必要があるな。」

『そういうことになるね。』

ソニック達は上空からホワイトアクロポリスの様子を見ていた。

所々に敵が固まっており、数も多そうだ。

「よし、わかった。今回は皆で、いっせいに敵を排除していこうぜ。」

「確かに、バラバラよりそうしたほうがいいかもしれないな。」

「敵も多いからね。」

ストレンジャーの意見に皆が同意した。

「よし、行くぜ！！」

ソニック達は近くである4番ポートへ向けて飛んでいった。

「敵軍がこちらに向かっています！！」

ホワイトアクロポリスにいた敵がソニック達を発見し、トランシーバーで親機に連絡していた。

「いかがいたしますか？」

『近場にいる全軍はそっちに向かえ！ 遠くへいる軍は引き続き、周りの状況を監視だ！』

「了解しました！」

「よし、ここら辺でいいか。」

ソニック達は前回船の乗り降りに使っていた4番ポートへ降り立った。

「でも、休んでる暇はなさそうね。」

アルドールは4番ポートの入り口を見て言った。

入り口の方からは大量の足音が聞こえてくる。

「よし、じゃあ行くぜ！」

「了解です！」

「いっくわよー！」

「行くぜ！！」

ソニック達は全員で入り口へ向かっていった。

「敵発見！」

「コレより戦闘体制に入ります！」

「覚悟！！」

敵軍もソニック達へ向かっていった。

数分後・・・

「ふう、やっぱりそれほどじゃなかったな。」

ソニック達は手に付いた砂埃を払いながら言った。

「所詮は下っ端って事だな。」

「テイルス、反応の方はどうだ？」

『ソニック達がたくさん敵を倒してくれたおかげで場所が特定できたよ。場所は前泊まったサンプライズの屋上だよ。』

「了解だぜ。テイルス。」

ソニック達はサンプライズへ向かって走っていった。

ホテル サンプライズ

「さて、付いたはいいが。」

「やっぱり敵が多いわね。」

ソニック達はホテルの近くの茂みからホテル周辺の様子を見ていた。

「だとすると、分かれた方がいいかも知れないな。」

「どうするんだ？ スtrenジャー」

「このまま正面から屋上へ目指す班と、翼を使って外部から屋上へ目指す班に分かれるんだ。どうだ？」

ストレンジャーはソニック達へ案を出した。

「確かに、建物の中じゃ大勢の方がきついかもしれないしな。」

「いい案ね。」

「よし、じゃあそれで行こうぜ。」

「決まりだな。」

「班はどうするんだ？」

「俺とアルドールとナックルズは外から。 ソニックとエミーとフォックスは中からでどうだ？」

「いいぜ。」

「了解。」

「よし、じゃあ俺らが先に行って敵をひきつけるぜ。」

「頼むぜフォックス。」

「行くぜ！！」

ソニック達は茂みから飛び出し、ホテルへ向かって突撃していった。

「敵発見！！」

「邪魔だぜお前ら！！」

ソニックは手にしている槍で敵を払い飛ばしていく。

「乙女の恋はノンストップよ！！」

エミーはハンマーで敵をぶっ飛ばしていく。

「邪魔はさせないぜ！！」

フォックスはブラスターで敵を攻撃してホテル内部へ目指していった。

「よし、そろそろ俺達も行くぜ。」

「いいわよ。」

「了解だ。」

ストレンジャー達は少し時間を空けて空へ飛んでいった。

「ホテルに入ったはいいけど、どうする？ フォックス。」

「エレベーターは電源を切られたらアウトだ。少しきついかもしれないが階段で行こうぜ。」

「わかったわ。」

ソニック達は敵を払い飛ばしつつ、階段を駆け上っていった。

「先に付いちゃわないとな。」

「ええ、浄化の作業もあるからね。」

「急ごうぜ。」

ストレンジャーたちも少々スピードを上げつつ、屋上を目指していった。

「よし！ 付いたぜ。」

先に屋上へ着いたストレンジャー達。

「宝石はどこ？」

アルドールは辺りを見渡し、宝石を捜した。

「お目当てはコレかな？ お嬢さん。」

「！ オマエ！！」

ホテルの階段出口の上に黒くなったダイヤを持った敵が言った。

「オマエ！ 生きていたのか！？」

だがそこにいたのは以前、ピーチ姫を誘拐した親玉だったのだ。

「あれは自爆ではなく緊急時の脱出用の爆弾だ。 あれくらいで死ぬわけがないだろ。」

「生きていたのね。」

「だとしたらもう一回聞く。お前達は何者だ？」

「まあせっかくだから言っておくか。俺達は【世界破壊グループ】だ。」

「世界破壊だって！？」

「ああ、お前達が知らない別の世界など数え切れないほどある。 そのいない世界を破壊していくのが俺達の仕事だ。」

「そんな事していいと思っているの？」

「ああ、俺達の住んでいた世界が壊された。その報いだ。」

「報い・・・」

「さて、俺達の計画を邪魔するやつはオレがじきじきにやってやる。掛かってきな。」

敵は汚れたダイヤを懐へしまい、ストレンジャーたちを誘った。

「その計画を実行させるわけには行かない！」

「私達が阻止して差し上げます！」

「覚悟しな！！」

ストレンジャー達はそれぞれの武器を手に、敵に襲い掛かった。

「掛かったな。」

「何！」

敵は手にしていたくもの巣を手から前方へ繰り出した。

「しまった！！」

ストレンジャー達は走った勢いでバックすることが出来ず、そのまま網に絡まってしまった。

「馬鹿だなお前ら。」

敵はゆっくりストレンジャー達の元へ近づいて行く。

「さて、残っていた青竜と朱雀の排除をさせてもらおうか。」

「オマエ！ 俺達の家族をどうした！」

網からの脱出を試みていたストレンジャーが敵に問いた。

「家族？ ああ、他の種族達か。 あいつらなら全員排除した。今じゃお前らのいた島にはお前らの家族はいねーよ。」

「貴様！！」

「さて、おしゃべりはここで、お前らを消すことにするか。」

「！！！」

敵は懐から拳銃を取り出した。

「覚悟！！」

「そうわさせないわ！！」

敵の後方から急に声がした。

「誰だ！！ グワッ！！」

敵はストレンジャー達を飛び越え、前方へ飛んでいった。

敵がいた所にハートが舞っていた。

「あの時はよくもやってくれたわね。」

「貴様！！」

「ピーチ姫！！」

そこに立っていたのはなんとピーチ姫だった。

「皆さん、大丈夫ですか！？」

「ああ、俺達は大丈夫だ。」

「よそみをしていられるなんていい度胸だな。ピーチ姫。わざわざまた連れ去られにやってきたのか？」

飛ばされた敵は体制を建て直し、こちらにやってくる。

「いいえ、あなたを倒すためにやってきたのよ。」

「言わせておけば！！」

敵は持っていた拳銃をピーチ姫に向けて発砲した。

「ピーチ姫！！」

「させないぜ！！」

ホテルと屋上をつなぐ階段からフォックスが出てきて、リフレクターを姫の前に発動させた。弾丸はすべて跳ね返され、敵の下へ飛んでいった。

「何！！」

敵は弾丸をすべて自分で喰らい、その場へ崩れ落ちた。

「くっ！」

「仕上げよ！！」

ピーチ姫はどこからともなく取り出したフライパンで相手をぶっ飛ばした。

「グワーーーー！！！」

フライパンのいい音と共に、敵は見事に空へ飛び、星になった。

「皆さん、無事ですか？」

ピーチ姫はストレンジャー達を捕らえていたくもの巣のような網を魔法で溶いた。

「ああ、俺達は大丈夫だ。おかげで助かったぜ、ピーチ姫。」

「ありがとうございます。」

「いえ、わたしはあの時の恩を返したまでです。」

ピーチ姫はそう言った。

「でもどうしてピーチ姫が一人でここに？」

「元の世界へ戻るときにちょっと違和感があったので、私だけ来たんです。」

「そうだったのか。」

「でも、その違和感がこれだったんですね。おかげでなんかスッキリしました。」

「さて、残った仕事をしないと。」

「持ってきたぜストレンジャー。」

ソニックはさっきの敵が持っていたダイヤを持ってきた。

「すまなかったな。ソニック」

「いって、コレくらい。」

ストレンジャーはソニックから汚れたダイヤを受け取った。

するとダイヤは浄化され、綺麗な色を放ち始めた。

「ステキ・・・」

「浄化終了っと。」

「テイルス、反応の方はどうだ？」

ソニックはスコープからテイルスへ聞いた。

『もう全部消えたよ。浄化も済んだんだね。』

「ああ、じゃあコレより帰還するぜ。」

『了解です。』

「では皆さん。お気をつけて。」

「ああ、ピーチ姫も気をつけてな。」

「ありがとうございます。」

ピーチ姫は飛び立ったソニック達を手を振って見送った。

「では私も、帰ることにしましょう。」

ピーチ姫は持っていたパラソルを開き、振りかざすとそのまま出てきたハートと共に消えてしまった。

— 続く —

ミスティックルーイン テイルスの工房

ホワイトアクロポリスで見事浄化に成功したダイアを持って、ソニック達はテイルスの待つ工房へ帰ってきた。

「今帰ったぜ、テイルス。」

「お帰りー 皆。」

テイルスはモニター前からソニック達のもとへ駆け寄った。

「どうだった？」

「ごらんの通りだ。 ケガも無いし、宝石も持ってきたぜ。」

ストレンジャーは持ってきたダイアをテイルスへ渡した。

「やっぱり綺麗だねー じゃあ早速。」

テイルスはストレンジャーからダイアを受け取り、モニターの前へ置いた。

「ええっと、次は・・・」

テイルスは出てきたポイントの場所を調べ始めた。

ソニック達もモニターの前へ。

「よし、場所がわかったよ。」

テイルスは座っていた回転式のイスに座ったまま、ソニック達の方を向いた。

「今度はどこだ？ テイルス。」

「ここからすぐの、ミドルガーデンに反応があるんだ。」

「ミドルガーデンってすぐそこじゃないか。」

「全然気がつかなかったな。」

「近場だから僕もいっしょに行くよ。」

「よし、じゃあ今から見てくるか。」

ソニック達は帰って早々、ミドルガーデンへ向かっていった。

ミドルガーデン 近辺の森

「ここら辺から注意した方がいいな。」

先を進んでいたソニックが皆に注意を呼びかけた。

「でもここまで来たのに敵の一人もないなんて。」

「まさか罠？」

「罠でも行くしかないさ。行くぜ。」

ナックルズは走らず、そのまま先頭を進み、ミドルガーデンへ向かっていった。

ソニック達もナックルズの後を歩いて向かっていった。

「よし、付いたぜ。」

「うーん、夕日がまぶしいね。」

ソニック達が出発して数十分。目的地であるミドルガーデンへ到着した。

「あ！ あそこに誰がいるよ！」

テイルスは前方の夕日を指差した。

ソコには二つの人影が。

「そこにいるのは誰だ！」

ソニックは人影に向かって問いかけた。

「おや、もうついたのか？ 相変わらず早いなストレンジャー。」

「アルドールもいっしょだったのね。」

「え！？」

「どうして俺達の名前を・・・」

ストレンジャーとアルドールは前へ出て影に問いかけた。

「知ってるも何も」

「昔の友人じゃないの。」

「まさかお前ら！」

「ピスフリー！！ ジョイ！！」

アルドールは人影に向かっていった。

ストレンジャー達も後に続いていく。

「久しぶりだな。ストレンジャー。アルドール。」

「やっとあえたわね。」

「やっと会えたのね。私達。」

「・・・」

アルドールは昔の友人達との再会を喜んでいた。

だがストレンジャーはあまり喜んでいなかった。

『おかしいな。 確か夢では、あいつらはテトラクリスタルアイランドへいるはずなのに。それにどうしてここで敵の反応があったんだ？』

「どうしたの？ スtrenジャー？」

アルドールは多少考えていたストレンジャーに問いかけた。

「うれしくないの？」

アルドールはストレンジャーの顔を覗き込んだ。

「アルドール。ちょっとそこにいて。」

「え？ どうして？」

「いいから。」

ストレンジャーはアルドールとソニック達を後ろに、自ら前へ出た。

「お前らは本当にピスフリーとジョイなのか？」

「ああ、俺達は本物だぜ？」

「急にどうしたの？ストレンジャー。」

「そうよ、どうしてそんなことを？」

3人はストレンジャーに次々と言った。

「アルドール、俺がお前と再会したとき、すぐに名前を言ったか？」

「え？ う、ううん。すぐには名前を言わなかったわ。」

「でも彼らはすぐに名前を言った。それに。」

ストレンジャーはさらに前へ出て言った。

「お前ら。再会の兆しはどうした？」

「あ！」

アルドールはあの時の事を思い出し、驚きつつ二人を見た。

「チッ。バレちゃったか。」

ピスフリーとジョイが不適な笑みを浮かべた。

「お前らが本物だったら、まず、あれを見せたはずだ。だがお前らは言わなかった。それに、ここには敵の反応があった。だとしたら、お前らが敵だといっても、間違いではないはずだ。」

「さすがは時期青龍の後継者だ。頭がさえてるな。」

「ちょっと情報不足だったわね。」

敵は姿を戻さず友人の姿のまま喋った。

「本物をどこへやった！」

「あいつらならお前らの故郷でお前たちを待ってるぜ。」

「まずはコレを置いていくわ。」

ニセモノのジョイが汚れたガーネットを出した。

「あとコレもな。」

ピスフリーの方は汚れたエメラルドを出した。

「これらを浄化して、俺たちのいる所まで来な。」

「そこで最終決戦と、お前たちの命を頂かせてもらうぜ。」

「そうはいかせないがな！ サンダーブレス！！」

ストレンジャーは相手に向かって電気玉を出した。

だが敵は高く跳躍してそれを避けた。

「俺たちは先に島へ戻るとするか。」

「そこにいる時期、青龍と朱雀の後継者。俺たちのところまで来るんだな。」

「じゃあな！」

ニセモノたちは海に置いてあった水上スキーに乗ってどこかへ去っていった。

「あれがニセモノだったなんて。」

「ストレンジャー、よくわかったな。」

「いや、俺もある忠告が無かったら、だまされていたよ。」

ストレンジャーは話しつつ、汚れた宝石たちを浄化し始めた。

「忠告？」

「ああ、今日の朝、俺、起きるのが遅かったら？ その日の深夜に、誰かはわからないが忠告とピスフリー、ジョイの居場所を聞いたんだ。」

「そうだったの。」

「それに、テイルスのメカにはここに敵と宝石があると反応してただろ？ だからおかしいとおもったんだ。」

「そうだったのか。俺たち全然気にもしてなかったぜ。」

「そういう点では、本当によく頭が回るのかもしれないな。」

「かもしれないな。 よし。」

ストレンジャーは浄化したガーネットとエメラルドを持ってきた。
宝石は綺麗になり、赤と緑の光を放っていた。

「よし、じゃあ一回工房へ戻ろうぜ。」

「ああ、わかった。」

ソニック達はまた、テイルスの工房へ引き返していった。

— 続く —

ミスティックルーイン テイルスの工房

ソニック達はミドルガーデンで最後と思われる宝石を入手した。
最終決戦の場所、テトラクリスタルアイランドへ向かうための架け橋を。

「宝石を全部あわせると全部で4つだね。」
「ああ、でも何の宝石なのかちょっとわかんないな。」
「でもどこかで見たことあるのよね・・・」

ソニック達はミドルガーデンから帰ったそうそう、メカエリアへやって来た。

「確かに、懐かしい感じはするんだけど。」

ストレンジャーとアルドールは浄化した宝石を観察しつつ、言った。

「とりあえずコレで島の場所がわかるんだよな。」
「うん、あの人たちの言っていたことが本当ならね。」

テイルスは浄化したパール、ダイヤ、ガーネット、エメラルドを寄せた。

すると4つの宝石はそれぞれ強烈な光を放ちだした。

「うわっ！！」
「まぶしい！！」

ソニック達は目の前に腕を置き、目から光を遮った。

しばらく光ること数秒。
宝石の放っていた光は弱まり、最初の状態に戻った。

「うー、眩しかった・・・」

「でも何で急に放ち始めたんだ？」

「わかんない、本当に急だったわ。」

ソニック達は目の前に置いていた腕をずらした。

「あ、レーダーに反応が！」

フォックスがモニターを指差して言った。

「本当だ、でも場所がわかんないな。」

「ちょっと待ってて。」

テイルスはモニターの前へ行き、メカをいじった。

「場所がわかったよ。」

「本当か？ テイルス。」

ソニック達はモニター前へ集まった。

「わかったんだけど、ちょっとおかしいんだよ。」

「どういう意味だ？」

「反応場所がトロピカルアイランドなんだよ。」

「え？ どうして??」

「わかんない。でもソコから反応が出てるんだ。」

「となると、トロピカルアイランドから行けるのか？ テトラクリスタルアイランドに。」

「そういうことになるわね。」

全員は入手した情報を元に、しばらく考えていた。

「そういえばストレンジャー、君がまだテトラクリスタルアイランドにいる時、敵に襲われて島から脱出したって言ってたよね。」

テイルスはメカをいじりつつ、ストレンジャーに問いかけた。

「ああ、そうだけ。」

「脱出して最初に付いたのってどこ？」

「そのままトロピカルアイランドに出たんだ。細かい場所は覚えてないけど。」

「だとしたらそこからまたいけるのかも知れないよ。」

「どういうことだ？」

「その宝石たちが教えてくれた場所と、ストレンジャーが出てきた場所、いっしょでしょ？ そこが入り口なのかも知れないってこと。」

「確かに、可能性としてはあるわね。」

アルドールは言った。

「一応、調べてみる必要があるな。」

「そうだね。」

意見は一致し、次の活動が決まった。

「じゃあ誰が行くかだな。」

「僕が行くよ。」

話が一区切り付いた所で、テイルスは言った。

「テイルスが？ 大丈夫か？」

「うん。場所は大体覚えたから、そのエリアを搜索すれば見つかるとおもうんだ。」

「テイルス一人じゃ危ないだろ。」

「いいぜ、行ってこいよ。」

ナックルズが言うのを遮り、ストレンジャーが言った。

「いいのか！？ スtrenジャー。」

「せっかく行ってくれるって言ってるんだ。止める意味、ないだろ？」

「まあ確かにそうだが・・・」

ストレンジャーは言いつつ、テイルスの元へ

「頑張って見つけてきてくれ。」

「うん。行ってくるね。」

テイルスはダイアを持って、一人メカエリアから出て行った。

「でもどういう風の吹き回しだ？ いつもならストレンジャーが付いていくって言うのに。」

ソニックはストレンジャーに問いかけた。

「テイルスだってもう子供じゃないんだぜ。 いつも、ソニック達をあこがれて後から付いていくばかりじゃないだろ？ それに。」

ストレンジャーはソニック達に言った。

「『ソニックに頼られる相棒になりたいんだ』って、テイルス、言ってたからな。」

一方、ソニック達と分かれたテイルスは一人、空を飛んでトロピカルアイランドへ向かっていった。

「ふう、ようやくついた。」

テイルスはストレンジャーの家の近くの砂浜に着地した。
そしてフルーツがたくさん生える森へ向かっていった。

「ええっと、確かこの辺なんだけど・・・」

テイルスは森を歩きつつ、ダイアの輝きが強いポイントを求めて歩いていた。
しばらく歩くととある木の前でダイアが強い輝きを放ち始めた。

「うわっ！ 眩しい！！ だとするとここがそうなのかな。 あれ？」

テイルスは反応があった木を見た。
するとそこには前に食べた月明かりの実が実っていた。

「月明かりの実だ。反応があるのはここだからここに入り口があるのかな。」

テイルスは木の周りを調べ始めた。
だがダイアの輝きはあまり変わらず、コレといって変わった場所も見当たらなかった。

「うーん、コレといって特に何もないなあ。」

テイルスはしばらく調べた後、もと来た道に戻っていった。

ミスティックルーイン テイルスの工房 メカエリア

「ただいまー」

「お帰りテイルス。」

テイルスは島を出た後しばらく飛び、メカエリアへ帰ってきた。
出迎えたのは本を読んでいたストレンジャー

「あれ？ 皆は？」

「一回外へ出てくるって。」

「そうだったんだ。」

「搜索の方は、どうだった？」

「うん、大体場所はわかったよ。 月明かりの実が実っていた木の周辺に反応があったの。」

「だとしたらその辺りに何かあるのかもしれないな。」

「うん。」

「それじゃあ明日の朝、行ってみるか。」

「わかった。」

二人はしばらく話をし、明日島へ行くことになった。

決戦はすぐそこまで迫っていた。

— 続く

—

ミスティックルーイン テイルスの工房 メカエリア

ミスティックルーインに朝日の光が届きしばらく時間が過ぎた頃
テイルスの工房内にあるメカエリアからアーウィンのエンジン音が聞こえた。

「フォックス、これで大丈夫そう？」
「ああ、バッチリだぜテイルス。」
「それじゃあ、俺たちも行こうぜ。」
「うん、わかった。隔壁オープン！！」

メカエリアの隔壁が開き、海辺への入り口が開いた。

「行くぜ！！」

ソニック達とアーウィンに乗ったフォックスはトロピカルアイランドに向かって飛んでいった。

トロピカルアイランド

しばらく飛び、トロピカルアイランドへついたソニック達一行。
フォックスはアーウィンから降り、宝石をソニック達へ渡した。
受け取ったソニック達は反応があった月明かりの木を目指して進んでいった。

「確かこの辺だったんだけど・・・」

テイルスはダイアを持って森の中を進んでいた。

「結構入り組んでるんだな。」
「ああ、自然が豊かな島だからな。 お、あれじゃないか？」

ナックルズと話していたストレンジャーが指差した方向には、月明かりの実が実った木が生えて

いた。

「ああ、あれだな。」

「段々宝石の光が強くなってきた。」

少し目を細めつつソニック達は木の元へ。

「ここら辺でいいのかな。」

ソニック達は持ってきた宝石を木の近くへ集めて置いた。

すると宝石たちはそれぞれ緑色、紅色、黄色、青色の強烈な光を放ち始めた。

「ううっ、やっぱり何回も見てるけど強烈な光だね・・・」

ソニック達は腕を目の前へ置き、光をさえぎりながら言った。

「あ！ みて！！」

エミーが指差した方向をソニック達は見た。

するとソコには光が一点に集中した場所が出来ていた。

「あそこが入り口か？」

「とりあえず行ってみるしかないな。」

ストレンジャーは光へ向かって行った。

するとストレンジャーは光の中へ吸い込まれていった。

「私も行くわ！」

アルドールもストレンジャーを追いかけて光の中へ向かっていった。

「まって二人とも！」

テイルスも二人を追いかけて光の中へ向かっていった。

「俺たちも行こうぜ！」

ソニック達も順番に光の中へ向かって行き、吸い込まれていった。
全員が吸い込まれると宝石たちもソニック達を追いかけて光の中へ吸い込まれていった。
宝石の光が無くなると、集中した光は消滅し、輝きが無くなった。

テトラクリスタルアイランド周辺 ミドルガーデン

テトラクリスタルアイランドの近くにある小島にトロピカルアイランド同様、光が一点に集中し、最初に飛び込んだストレンジャーが出てきた。

「よっと、ここは？」

ストレンジャーが辺りを見回しているとアルドール、テイルス、ソニック達が光の中から出てきた。

「ここは？」

「テトラクリスタルアイランドの近く、みたいだな。」

ストレンジャーは前方に浮かんでいる島を見ながら言った。

「あれがテトラクリスタルアイランド？」

「すごい大きな島！」

島はすぐ近くにあり、とても大きな島がストレンジャー達の前に写っていた。

「・・・あの島に、皆がいるのか。」

「早く迎えに行かないと、ね。」

ストレンジャー達は後から出てきた弱く輝く宝石を収集した。

「さて、どうやっていくかだな。」

「一筋縄では行きそうにないわね。」

島にはなんと黒いオーラが張り巡らされており、ドーム上にバリアが張られていた。

「あのオーラをどうにかしないとな。」

「どうやって入るかだな。」

ソニック達はしばらく考えていた。

「どこか抜け道はないの？」

「確かそういうのは無かったんだ。他の人たちが入ってくるかもしれなかったからな。」

「だとすると、正面からしかないわね。」

「ここにいても仕方ない、とりあえずあのオーラの元へ行ってみようぜ。」

「わかったわ。」

ソニックの意見に賛成し、宝石を持ってソニック達は島へ向かっていった。

「さて、どうやって入るか、だな。」

一時島の近くの海上へやってきたソニック達。

「闇雲にやるより何か方法が無いとな。」

「とりあえず俺が行くぜ。」

ストレンジャーは宝石をソニック達に預け、剣を片手にオーラへ向かっていった。

「破ッ！！」

剣をオーラへぶつけたストレンジャー

剣とオーラの接触面から紫色の閃光が飛び交う。

「チッ。」

ストレンジャーは一回剣をオーラから離し少し後へ。

「さすがに剣だけじゃダメか。」

「じゃあ今度は私が行くわ。」

今度はアルドールが扇と杖を持ってオーラへ攻撃を仕掛けた。

「エイッ！！」

扇で作り出したカマイタチは、杖から出した水晶を乗せてオーラへ向かっていった。

水晶とオーラがぶつかりと剣同様紫色の閃光が飛び交った。

すると水晶は少し汚れ、そのまま跳ね返され、ソニック達の元へ帰ってきた。

「うわっ！」

ソニック達は緊急回避をし、水晶を避けた。

「確かに、一筋縄では行きそうにないわね。」

「うーん。」

ストレンジャーは少し得た情報を元に少し考えた。

「どうする？ スtrenジャー。」

「普通的水晶だけじゃダメみたいだな、すぐに汚れてしまう。 だとしたらもう少し破魔の力があるのかも。」

「破魔？」

テイルスがストレンジャーが言った言葉に疑問を抱きつつ、ストレンジャーが言い出した。

「アルドール、さっきの扇であれをやってくれ。」

「でも、それだけじゃダメなんじゃない？」

「まだ手段があるさ。あせるなって。」

「う、うん。 わかった。」

アルドールを一回説得し、ストレンジャーが結論を言った。

「アルドールが破魔の力を作るだろ、でもそれだけじゃきっとダメだ。だから。 ちょっと貸して。」

ストレンジャーはアルドールから杖を借りた。

「テイルス、前回同様、アルドールが技を使ったら、コレで水晶を出してくれ。」

「うん。わかった。」

テイルスはストレンジャーから杖を貰った。

「ナックルズ。 君はアルドールがこれから作る竜巻にそのハンマーを回して風をもっと作ってくれ。」

「了解だ。」

「ソニックは俺とその竜巻に乗って、水晶とともにオーラへ向かって攻撃をしてくれ。」

「わかったぜストレンジャー。」

「攻撃をしたら皆その攻撃地点へ向かって突撃してくれ。」

「わかったぜ。」

「了解よ。」

「よし、行くぜ。」

ストレンジャー達は体制を立て直し、攻撃態勢へ。

アルドールは少しソニック達の前へ出て、扇を出し、その場で回りだした。

すると白い光の粒子が入る竜巻が作り出された。

「セイント・・・ ロンド！！」

ナックルズはアルドールと共に同じ方向へ回りだし、さらに竜巻の回転数を増やしていく。

「よし、テイルス、頼む。」

「OK、それっ！！」

テイルスは小さくも強力な水晶を竜巻に向けて放った。

「よし、ソニック 行くぜ！」

「おう、ストレンジャー！」

ソニックとストレンジャーは竜巻へ向かって飛んで行き、竜巻の中へ入るとオーラに向かって回転攻撃をしていった。

テイルスたちも竜巻の後を追っていく。

「行くぜ！！！」

ソニックとストレンジャーがオーラへ攻撃をした。

紫色の閃光が竜巻との接触面でほとばしるも、竜巻の力で段々オーラが歪んでいく。

「破ッ！！」

パキッ！

オーラが割れるのといっしょに竜巻が無くなり、竜巻に触れていた部分のオーラが消えた。だがそれと同時にオーラが収縮しつつ破壊された部分が修復されていく。

「皆！ 急げ！！」

先に島へ潜入したソニックとストレンジャーがナックルズ達に言った。

ナックルズ達も急ぎつつ、空いた穴から島へと潜入していく。

オーラの破壊部分が小さくなりつつゆくなか、少し遠い場所にいたテイルスが、急いで進んでいく。

「テイルス！！」

ストレンジャーが壁の外へ手を出し、テイルスへ差し出した。

「ストレンジャー！！」

テイルスもそれを求めて飛んでいく。

ストレンジャーがテイルスの手を取ったのと同時に手を引いた。

テイルスはそれと同時にストレンジャーの元へ引かれ、二人の体がぶつかったのと同時に、破壊された部分のオーラが修復された。

ドスッ！

「大丈夫か？ テイルス。」

「うん。大丈夫。 ありがとうストレンジャー。」

二人は島へ上陸したソニック達の下へ。

「大丈夫だったか二人とも？」

「ああ、俺は大丈夫だぜ。」

「僕もだよ。」

「よし、じゃあ急ごうぜ。」

ソニック達は少し暗い島を進んで内部へ向かっていった。

—続く—

テトラクリスタルアイランド

ソニック達は無事、外へ張り巡らされていたオーラを破壊し、島内部へと侵入した。もちろん、その様子は敵の本部へ伝わっていた。

「フッフッフッ やはり忍び込んできたか、馬鹿な奴らめ。」

敵の親玉と思われる人影が、地下のシェルター内に設置されたモニターからストレンジャー達を見ていた。

「・・・いかがいたしますか、陛下。」

陛下と呼ばれた人影は、呼ばれた方へ振り返った。

「まあ、いちよう小手調べとするとしよう。 敵軍団を奴らの下へ送れ。」

「・・・かしこまりました。」

命令を受け、敵の一人は部屋を出て行った。

「さて、面白いショータイムの幕開けだ。」

一方、潜入したソニック達は、南側の草原のエリアにいた。

「一応潜入は成功だな。」

「でも壁の穴が修復されちゃったね。」

テイルスはソニックとストレンジャーが空けた穴のあった場所を見ながら言った。

「まあそれくらい、何とかなるだろ。 敵を倒せばコレは無くなるはずだからな。」

「確かにな。」

草原の芝生に座っていたソニック達は立ち上がった。

「じゃあこれから、ピスフリーとジョイを探しに行こうぜ。」

「でもどこを探すの？」

「一応この島のどこかにいるのは確かだ。ここから手分けして探そうぜ。」

「ここは南側のエリアだから、東エリアと西エリアに別れるんだね。」

「そういうことだ。」

「じゃあ一番詳しい俺たちが分かれるとして、ソニック達はどっちに行く？」

ストレンジャーはソニック達に問いかけた。

「そうだな、じゃあ俺は西エリアに行こうかな。」

「ソニックが行くなら私も！」

エミーはソニックの腕にしがみつきながら言った。

「じゃあ俺たちは東側だな。」

「そうだね。」

「決まりだな。」

東側にはストレンジャー、テイルス、ナックルズ。

西側にはアルドール、ソニック、エミーが行くことになった。

「見つけたら、何かあったら、トレジャースコープで知らせてくれ。」

「わかったわ。」

ソニック達はそれぞれ分かれていった。

東側 砂浜エリア

ソニック達と別れたストレンジャー達は森を抜けて砂浜のエリアへと出た。

「草原から一編だね。」

テイルスは草原から変わった砂浜のエリアを歩きながら言った。

「ああ、俺たちの種族はここで住んでたんだ。」

「砂浜にか？」

「そうだけ。」

ストレンジャー達は砂浜のエリアへ到着し、周囲を探索した。

「うーん。やっぱり太陽の光が遮断されてて、ちょっと暗いね。」

「大して見えねえな。」

「じゃあ、あれを使うか。」

ストレンジャーは一回元来た森とはちょっとずれた森へ入っていった。
テイルスとナックルズはストレンジャーの後を追った。

「ストレンジャー」

「何を探してるんだ？」

「ああ、ちょっと花をな。」

ストレンジャーは辺りを見渡し、花を探していた。

「でも花なんてこの暗さじゃ見つかんねえんじゃないか？」

「いや、この暗さだからわかるんだ。 お！ あったぜ。」

ストレンジャーは森の先から出る光の下へ向かっていった。

「ほら。」

「うわあ！　すごい！！」

テイルス達の前に咲いていたのはなんと光を放つ花だった。

「なんなんだ？　この花？」

「コレは月影草っていうんだ。　辺りが暗くなると、自分で作った光を放つ花なんだ。」

「すごい綺麗だね。」

「この島には変わった植物がいろいろ生えてるんだ。ほら。」

ストレンジャーは先に咲いている花を指差した。

「コレはなんの花なの？」

テイルスはストレンジャーが指差した赤い実のついた花を持ってきた。

「それは火球草って言って、その赤い実には熱い炎の分子が詰まってるんだ。大きい実ほど強い炎が入ってるんだ。」

「そうなの？　すごいねー」

「こっちの花はなんだ？」

ナックルズは別の方に生えていた花を指差していった。

その花からは青く水の泡が時々出ていた。

「それは水泡草って言って、シャボン玉みたいな泡を作る花なんだ。　強く振るとたまに水も出てくるけどな。」

「そうなのか？　それ！」

ナックルズは花を摘み、振ってみた。

すると花からは水鉄砲が飛び出し、月影草に水を与えた。

「おお、すげえな。」

「自ら水を出すんだね。」

「でもストレンジャー、コレって武器に出来ないのか？」

ナックルズは水泡草を吹いてシャボン玉を作りつつ言った。

「まあ使えなくも無いかな。　そんな使い方をすることなんて無かったからわかんないけど。」

「確かに使えそうだね。」

テイルスは数本花を摘んでいった。

「まあそれは置いといて、とりあえず月影草を摘んで、辺りを搜索しようぜ。」

「うん。」

「了解。」

ストレンジャー達は月影草を摘み、元来た道に戻っていった。

「おおっと、早速着やがったな。」

ストレンジャー達が砂浜のエリアへ戻ると敵の大群が待ち受けていた。

「よし、じゃあいっちょおっぱじめるか！」

「いっくよー！」

3人は敵の大群へ向かっていった。

西側 岩山エリア

一方、ストレンジャー達と別れたアルドール達は少々急な岩肌を上っていた。

「結構厳しい道だな。」

「そうね。」

ソニック達はほぼロッククライミングに近い体制で上っていた。

「ねえ、あと頂上までどれくらい？」

エミーは飛んでいるアルドールへ問いかけた。

「あと少しみたいですよ。もうすぐ岩がなくなるので。」

「いいわね。空を飛べて。」

「仕方ないだろ、羽一枚の効力はここじゃ無力なんだから。」

「すみません。あまりお役に立てなくて。」

「アルドールは悪くないって。気にすんな。 お、ついたぜ。」

ソニック達は数分のロッククライミングに近い登山を終えた。

「ああー、疲れたー」

「でも、休んでる暇はなさそうだな。」

「そうみたいですね。」

頂上にはなんと敵の大群が待ち受けていた。

「少しは休ませてよね。」

「まあ、敵だから休ませてくれねえだろうな。」

「そうですね。行きますよ！」

ソニック達は敵の大群へ向かっていった。

「やっぱり結構な量だな。」

「そうだね。」

一方こちらも敵と戦っている東のテイルス達。

敵は大群でやってきており、倒してもきりがなく出てくる。

「これじゃあきりが無いな。」

「よし、じゃあコレを使ってみるかな。」

ナックルズは隠し持ってきた火球草の実を取り出した。

「そうか、その手もあったな。」

「よし、それ！」

「ファイヤーブレス！！」

ナックルズとテイルスは持っていた実を敵に向かって投げつけた。

その実めがけ、ストレンジャーは火玉をぶつけた。

実に炎がぶつかると実は燃え、凄まじい爆発を発生させ、敵を炎ごと吹き飛ばした。

「やった！」

「上手くいったな。」

敵は燃え尽き、灰になった。

「さすがだな、ナックルズ。」

「これくらいなんてことねえって。」

「じゃあ次の場所の散策に行こ。」

テイルス達は月影草を片手に、砂浜のエリアを後にした。

ストレンジャーは少し、名残惜しみながら。

一方変わって西のソニック達。

こちらもストレンジャー達同様に敵と戦っていた。

「ちっ　さすがに最後の場所なだけあって手ごわいな。」

「そうね、なかなか敵が片付かないわ。」

ソニック達も同様に少し敵と苦戦していた。

「やっぱり突破口がないとコレは厳しいな。」

「どうしようアルドール。」

「確かこの辺には変わった花が咲いてるはずなんですけど・・・」

アルドールは敵と戦いつつ、花を探していた。

「花？」

「でも花なんて何につかうのよ。」

「とっても綺麗ですごい力を秘めてるんです。　あ！　あれ！！」

アルドールは敵の後ろの方に咲いている一輪の花を指差した。

ソコには黄色い小さな花がたくさん付いた枝が生えていた。

「どっちかっていうと枝ね。 あれ。」

「あれを取れば何とかかなると思うんです。」

「よし、じゃあ邪魔なのを飛ばして最短で行くぜ！」

ソニックは槍を片手に敵に突っ込んでいった。

後からハンマーと扇を持ったエミーとアルドールが付いていく。

「おらおら邪魔だぜ！！！」

「あ！ あそこに！！」

「アルドール！ 急げ！！」

ソニックとエミーは前方の敵を抑えアルドールのために花への道を開けた。

アルドールはその隙に花を摘み取った。

「ソニックさん！ エミーさん！ 伏せて！！」

アルドールは摘み取った花を片手にソニックとエミーに言った。

ソニックとエミーはその場に伏せた。

「サンダーショック！！」

アルドールが振った花から強力な雷が敵に向かって飛んでいった。

雷が敵に当たると共に、当たった敵は次々と消えていった。

「ふう、」

「えらい目にあったぜ。」

「それにしてもすごい雷だったわね。」

エミーはアルドールが持っていた花を見ながら言った。

「これは雷華草と言って、雷の力を充電する花なんです。 なので自然に出来た雷に相当する力を出すんですよ。 充電しないと一回しか使えませんが。」

「すごい花なんだな。」

ソニックは花に触れようとした。

「あ、あまり触らない方がいいですよ。 電力が無くなったといっても、静電気は残ってますので。」

「おおっと、それは危ないな。 でもこの花、充電すれば何回でもあの力を使えるのか？」

ソニックはアルドールへ問いかけた。

「ええ、そうですよ。」

「だとしたらストレンジャーに充電してもらえばもう一回使えるんじゃない？」

「でも自然じゃないと使えるかどうかちょっと……」

アルドールはちょっと考えながら言った。

「ま、それは置いといて、早くストレンジャー達に合流しようぜ。」

「そうね。」

ソニック達は西エリアへ向かおうとした。だが

「ウッ、」

バタッ！

急にソニックが倒れてしまった。

「！！ ソニックさん！！」

「ソニック……」

バタッ！

「！！ エミーさん！！」

ソニックの元へ行こうとしたエミーも倒れてしまった。

「ソニックさん！ エミーさん！！」

アルドールはソニックの肩をゆすった。
だが二人はそのまま目を閉じてしまった。

「いったいどうしたんですか！？」
『アルドール！！ 聞こえるか！！』

アルドールは急に起きた事態にあたふたしているとソニックがつけていたトレジャースコープから声がした。

「ストレンジャー大変なの！！ ソニックさん達が！！」

アルドールはソニックの付けていたトレジャースコープを取って言った。

『ああ、こっちも急にテイルスとナックルズが急に倒れちゃったんだ。』
「テイルスさんたちも！？」
『とりあえず今どこにいるんだ！？』
「今は西側の山のとっぺんにいるの。」
『ソコから東側の俺の家まで二人を連れてこれるか？』
「うん、何とかやってみる。」
『俺もテイルスたちを運んでいく。急いでくれ！』
「わかったわ！」

アルドールは通信を切り、スコープを折りたたみ、ドレスのポケットへしまった。

「うんしょ・・・」

アルドールはソニックとエミーの手を取り、二人を引っ張って飛んでいった。

—続く—

四人の再開 最終決戦

テトラクリスタルアイランド

島に潜入し、島を搜索していたソニック達

だが急にソニック達の意識が無くなり、倒れてしまった。

ストレンジャーは徒歩で、アルドールは空からストレンジャーの家を目指して進んでいた。

「うーん、重い・・・」

アルドールは意識の無い二人の手を引っ張り、ストレンジャーの家を目指して飛んでいた。

さすがに二人を運ぶのは重労働。

フラフラと上下左右起動が乱れつつもまっすぐに進んでいた。

『二人とも、大丈夫なのかな・・・』

アルドールは心配しつつも飛んでいった。

一方、テイルスとナックルズを運んでいるストレンジャー

ナックルズは背中に、テイルスは前から抱いて運んでいた。

「やっぱり二人運ぶのはしんどいな・・・」

二人は意識が無いものの、息はしているため生きていることはわかっていた。

『二人とも、もう少しだからな。』

ストレンジャーは見えた家を目指して進んでいた。

「ふう、ようやく付いた・・・」

先に着いたのはアルドール。

一時ソニックとエミーを地面に寝かせ少し休憩していた。

「おうアルドール、早いな・・・」

あとから付いたストレンジャーは二人をしょってやってきた。

「ストレンジャー、手伝うよ。」

「ああ、すまない。」

アルドールはテイルスを受け取り、ソニック達の下へ運んだ。

ストレンジャーは一回ナックルズを背負い直し、ソニック達の下へ。

「とりあえず、これからどうするストレンジャー。」

「ここじゃ敵の目にも付くかも知れないから、家へ。」

ストレンジャーは家を開け、自室へ皆を運んでいった。

「ふう。 ようやく1段落だな。」

「ええ。」

さすがに少々疲れ、一休みの二人。

部屋には急遽作ったベットに4人が寝ていた。

「でもどうして急に倒れちゃったのかしら・・・」

アルドールは4人を見つつ言った。

「多分外のオーラが関係してるんだと思う。」

「外の？」

「ああ、あれはほとんど闇で出来てる。俺たちはもともとこの住人だからなんてこと無いけど、テイルスたちは別の場所の住人だ。そういう点から、俺たちと耐久力が違うんだと思う

んだ。」

「闇は光をさえぎる物だものね。 早く何とかしないと。」

「そういえばさっき、北側のエリアに奇妙な建物があつたんだ。」

ストレンジャーはテイルスたちが気絶する前を見たことを言った。

「建物？ でも北側のエリアって、雪ばかりで、何も無いはずなのに。」

「ああ、だから少し妙だと思ったんだ。」

「調べる必要があるそうね。」

「ああ、今から行こうぜ。」

「ええ、」

『待ってろよ、皆。』

ストレンジャーとアルドールは4人を置いて、部屋を出て行った。

北側 雪原エリア

ストレンジャーとアルドールは空を飛び、問題の建物の前へやってきた。

「コレだアルドール。」

ストレンジャーが指差したのは四角い建物。

だがそれは高さが無く、1mほどの高さしかないものだった。

「家にしては確かに小さいわね。」

「しかもほとんど埋まってるんだ。」

「とりあえず中に入ってみましょ。」

アルドールは小屋の入り口へ向かっていった。

扉は鉄で引くタイプのものだった。

アルドールはドアの取っ手を引っ張った。

「あれ？ うーん。」

だがそれはびくともせず、開かない。

「開かないわ、ストレンジャー。」

「じゃあ俺がやるよ。」

ストレンジャーはアルドールと変わり、取っ手を引っ張った。

「うーん それっ！！」

バン！！

ストレンジャーは勢いよく扉を開けた。

中には地下へ続く階段があった。

「階段？」

「とりあえず行ってみようぜ。」

ストレンジャーは先ほど摘んだ月影草の明かりを頼りに降りていった。

アルドールはストレンジャーの肩をつかんで進んでいく。

しばらく降りると地下に付いた。

「結構深くまで降りてきたわね。」

「ああ、でもここは何だろう。」

ストレンジャーとアルドールは部屋を見渡した。

その部屋には特に何も無く、奥に扉があった。

「あ、入り口があるわ。」

「行ってみよう。」

二人は部屋の置くの扉を開けた。

奥は蜀台があり中は明るかった。

「明かりがついてる。」

「ここは・・・」

「ようやくお出ましですね。」

「！！ 誰だ！！」

不意に聞こえた声に二人は動揺していた。

部屋の奥から音が聞こえてきた。

部屋の奥にいた人影がストレンジャー達の前へ歩いてきた。

でも歩いてきたのは子供の犬。

「お前？ 確か！」

「ストレンジャー、知ってるの？」

「ああ、あの時の夢に出てきたやつだ。」

そこにいたのはストレンジャーの夢で出てきた子犬だったのだ。

「よくいらっしゃいました。 ストレンジャー、アルドール。」

子犬は柔らかい微笑をした。

「どうして俺たちの名前を？」

「知ってるも何も、後の方々に聞きましたので。」

子犬は少し横へずれた。

ソコには牢屋があり、中には白い虎と緑の亀がいた。

「ピスフリー！ ジョイ！！」

「ストレンジャー！？」

牢屋にいたピスフリーとジョイがこちらを振り向いた。

ストレンジャーとアルドールは牢屋の前へ。

「ピスフリー、ジョイ！ 大丈夫か！？」

「ええ、私達は大丈夫よ。」

「でもどうしてここが？」

「いろいろあるから、話すと長いんだけど、他の人たちとここまでやってこれたの。」

「そうだったのか。」

「今開けますね。」

子犬が鍵を持って牢屋を開けた。

「よかった、また再会できて。」

「ああ・・・ 俺達、また会えたんだよな。」

4人は再会を喜んでいた。

子犬は少し後でその様子を見ていた。

「そうだ君、君はどうしてここにいるんだ？」

ストレンジャーは子犬に問いかけた。

「僕は汚れた場所を感知する能力があって、その力でここにやってきたんです。」

「でもここはオーラが張ってあって、そう簡単には入れないはずなのに。」

「僕は貴方様方の様に一応それなりの力を持ってるので。 皆さんは、四神ですよね？」

子犬はストレンジャー達に言った。

「ああ、俺が青竜で、アルドールが朱雀、ピスフリーが白虎、ジョイが玄武なんだ。君はそうすると。」

「僕は一般的に狛犬、シーサーと呼ばれてます。でも僕はまだ子供なので、潜入するほどの力はあっても対抗は出来ないものなので・・・ エヘヘ。」

狛犬は頬を掻きながら言った。

「そういえばまだ名前を言ってませんでしたね、僕はビリーブ・ザ・セレモニーといいます。ヨロシク。」

「こちらこそ、ビリーブ。」

「とりあえず、外へ出ないと。」

「早く行きましょ。」

5人は地下から出て行った。

「ずいぶんと手間が掛かる生き物達だ。」

「！！」

ストレンジャー達が外へ出ると外には黒いマントを身にまとった影が雪の上へ立っていた。

「お前がこの軍団たちの親玉か？」

「まあ、そんな所だな。」

影は不気味な笑みを浮かべながら言った。

「さて、まとまったところで、お前たちを排除させてもらうとするか。」

影はマントから黒い剣を出した。

「お前たちなんかの好きにはさせない！！」

「かくごしな！！」

「ゆくぞ！！」

最終決戦が始まった。

— 続く —

テトラクリスタルアイランド 北側 雪原エリア

北側のエリアにてようやく全員と再会できたストレンジャーとアルドール
そこで出会ったビリーブと共に外へ出たが、前に光臨した悪の親玉に少し動揺していた。

「はああーっ！！」

ストレンジャーは剣を片手に敵へと切りかかった。

「破ッ！」

「フッ、甘いな。」

カンッ！

「何！！」

ストレンジャーと敵との間にシールドが展開された。
シールドは剣の攻撃を完全に遮断し、紫の閃光を出していた。

「チッ」

ストレンジャーは後ろへバックした。

「闇の力が強すぎるわね。」

「なら僕が！」

ビリーブは右手に破魔矢、左手に電気の弓を召還した。
ビリーブはそのまま矢を射る体制に。

「えいっ！！」

矢は小さな白い光と共に敵へと向かっていった。

「効かんな。」

矢はシールドに当たると少し汚れ、そのままストレンジャー達の元へ帰ってきた。

「ダメですか。」

ビリーブは矢を取りながら言った。

「さすが親玉ね。」

「一筋縄じゃいかねえか。」

「じゃあ今度は全員で行くまで！！」

5人はそれぞれ武器を片手に敵へと襲い掛かった。

「雑魚がいくら集まろうと私に触れられんわ！！」

前回の攻撃同様、ストレンジャー達と敵との前にシールドが展開され、紫色の閃光が迸る。そのままストレンジャー達を吹き飛ばした。

「クッ！」

「今度はこちらの番だ！」

敵は黒い剣を手にストレンジャーへ襲い掛かった。

「ストレンジャー！！」

「チッ！」

ストレンジャーは座った大勢から後ろへ後転し、体制を立て直し剣で攻撃を防いだ。剣と剣がぶつかるとシールド同様紫の閃光を発生させた。

「クッ！！」

「どこまで耐えられるかな？ ハッ！」

親玉はそのまま剣とストレンジャーを上空へ払い飛ばした。

そのままストレンジャーの元へ

「ストレンジャー！！」

「負けてられるかって！！」

ストレンジャーは空中で一回転し、今度は自ら敵へ襲い掛かった。

「破ッ！！」

「ハッ！！」

二人の剣がまたぶつかり、紫の閃光を出した。

敵はまた払い、ストレンジャーの後ろへ回り込むとストレンジャーにカカト落としをした。

ストレンジャーはそのまま雪の上へ打ち付けられた。

落ちた場所は雪が舞っていた。

「クッ・・・」

「ストレンジャー！！」

4人はストレンジャーの元へ。

「しっかりして！」

「コレくらい・・・なんてことねえって。」

ストレンジャーは少し痛む背中を押さえつつ、ゆっくり起き上がった。

「ハハハハ！ ずいぶんと強情なドラゴンだ。さっさとやられちまえばいいものを。」

敵は地上へ降り立つとそのままストレンジャー達の下へ歩いてくる。

「俺達はやられるわけにはいかねえんだ！ この世界のためにも！、テイルス達のためにも！！」

「そうよ！ たとえ私達がやられたとしても、貴方の事を止めて見せるわ！」

「それが俺たち、四神の使命でもあるから！！！」

「やられるわけには行かないのよ！！！！」

四人がそれぞれ言った。

すると4人に異変が。

キラッ！

「え！ 何！？」

「ひ、光だと！！ グワッ！」

ストレンジャー達の体は光り始め、親玉は目を服の袖で光をさえぎった。

すると光は、ストレンジャー達の体を光が包み込んだ。

次の瞬間、光は強く輝き、ストレンジャー達に衣服が見にまとわれていた。

「え！ これって。」

「族長様達に来ていた服に似てる・・・」

「俺たち、本当に四神になったのか？」

「後継者じゃなくて本物になったのね。」

ストレンジャー達は急に身にまとった服を見ていた。

「チッ、本物が登場しちまったか。」

悪の親玉は、ストレンジャー達が急に身にまとった服を見て言った。

「だが勝つのはこちらだ。何せ触れることが出来ないんだからな。」

「それはどうかな？」

ストレンジャーは敵を見て言った。

「俺たちが今までと同じと見られちゃ困るな。」

「本物になったのならば、その力で貴方を消して差し上げます！」

「言わせておけば！！」

敵は黒の剣を振り、黒のオーラをストレンジャー達に襲わせた。

「コレくらいなら！！」

ストレンジャーは4人を自分の後ろにし、手を地面へ当てた。

『木々達花々達、俺に力を貸してくれ！』

「召還！！」

ストレンジャーがそういうと前に巨大な巨木が地面から勢いよく生え出され、召還された。

巨木は黒いオーラを遮り、ストレンジャー達を守った。

「チッ、召還術か！」

「今度はこちらの番よ！」

アルドールは空中へ飛び立ち、持っていた扇を振り、風と共に炎を飛ばした。

「そんなのが利くと」

「利くに決まってるでしょ！」

アルドールが言うと、炎はシールドを抜けて敵へと降りかかった。

「グワッ、熱い！！」

敵は炎に包まれつつ、もがいていた。

「では、止めとさせてもらおうか。」

体の痛みが無くなったストレンジャーは巨木の後から出てきて、親玉へ言った。

「無駄なことを！」

「行くぜ！！」

ストレンジャーが言うと4人はそれぞれ武器を持って戦闘態勢に。

「行くわよ！！」

アルドールはまず杖を振り水晶を召還し、扇のカマイタチに乗せて敵に向けて飛ばした。

「行くぜ！！」

ピスフリーはその水晶と風をハンマーを高速回転させ作り出した竜巻にいれ、敵へ向けて放った。
。

「喰らいなさい！！」

ジョイはその竜巻に乗って槍を構え、水晶と共に敵へと襲い掛かった。
竜巻がシールドにぶつかると紫の閃光がほとばしった。

「何ッ！！」

シールドは防ぎきれず、竜巻と共に壊れてしまった。

「やった！ シールドが壊れたわ！」

「小癪な！」

「今度は俺の番だ！！ アイスブレス！！」

ストレンジャーはそういと、持っていた剣を空中へ投げ、その剣に向けてブレスを放った。
ストレンジャーが放ったブレスを受けた剣は白色に輝いた。
そのまま空中にある剣を取りに行き、ストレンジャーは技を放った。

「クリスタルウェーブ！！！」

グサッ！

ストレンジャーが持った剣は、先端のみ地上へ突き刺ささった。
それと同時に周りの空気が変わり、大量のクリスタルが地上から生え出し、敵の元へ波のように襲い掛かった。
クリスタルからは強力な冷気が漏れていた。

「何ッ！」

敵はクリスタルの波に飲まれ、クリスタルの中へ封じられた。

『くそっ！ 出しやがれ！！』

「コレでとどめよ！ この再会の兆しで、貴方の事を消し去ります！」

アルドールは再会の兆しのパーツを空へ投げた。
それを合図に3人も、持っていたパーツを空へ投げた。
パーツは合体し、一つの水晶で出来た星へを姿を変えた。
星はストレンジャーの元へ。

「喰らいやがれ！！」

ストレンジャーは星を敵へ向けて投げはなった。

「破魔の力を受けたまえ！！」

ピスフリーは破魔矢を弓でいり、敵へ向けて放った。

星と矢は合体し、強力な光を放ち、地上から生え出たクリスタルを破壊しつつ、敵へと向かっていく。

そして、敵へと突き刺さった。

「グワァー——————！！！」

敵は強力な破魔の力で消え去った。

それと同時に、周りの空気が変わり、オーラから光が漏れた。

「終わったのね。」

「終わったな。」

敵がいなくなり、オーラが上層部から壊れ始め、消滅していった。

オーラが無くなり、島には大量の太陽の日差しが降っていた。

そして、暖かな風が、島に吹いてきた・・・

風と暖かな日差しが島に降り注ぐと、島には倒れた人々が出現し始めた。

「！！ お父様！！」

ジョイは近くに出てきた亀の元へ行った。

「これって、」

「俺たちの種族達だ。ってことは。」

「皆、生きてるのか！？」

「行きましょ！」

アルドールはピスフリーを連れて南西側へ飛んで行った。

ストレンジャーは一人、東側へ飛んで行った。

島にはなんとやられたと思っていた4種族達が、倒れた状態で島に出現しはじめたのだった。

ストレンジャーが東側へ行くと西側同様、龍達が倒れていた。

「！！ 母さん！！」

ストレンジャーは家の近くで倒れていた母龍の元へ向かっていった。

「・・・ストレンジャー？」

「母さん、無事か！？」

ストレンジャーは母龍の肩を支えていった。

「ええ、私は大丈夫よ。ストレンジャー」

「よかった。」

母龍は体を起こし、立ち上がった。

「でもよかった、皆・・・無事で・・・」

ストレンジャーの目から涙がこぼれた。

「あの時から頑張ってたのよね。えらいわよ。」

「うん！」

ストレンジャーは涙を拭き、母龍へ笑顔をした。

「ストレンジャー！」

ストレンジャーの家から出てきたテイルス。

「テイルス！ もう大丈夫なのか？」

ストレンジャーは母龍からテイルスの元へ。

ストレンジャーはテイルスの体を見ながら言った。

「うん。もう大丈夫だよ。 ソニック達もね。」

「よかった。」

「でもストレンジャー、その格好、どうしたの？」

テイルスはストレンジャーが身に着けている服を見て言った。

「ああ、俺は青竜の後継者じゃなくて、本当の青竜になったんだ。」

「そうなの？ すごい！」

「ありがとう。 じゃあ俺が、君たちをもといた島まで送るよ。」

「うん、お願いね。」

「了解。」

ストレンジャーは笑顔でテイルスに言った。

そしてストレンジャーは、皆をミスチックルーインへと送っていった。
来た方法と同じ方法で。

トロピカルアイランド

「ソニック、テイルス。 無事だったか!？」

トロピカルアイランドで待機していたフォックスが、帰ってきたソニック達に問いかけた。

「うん。僕達は大丈夫だよ。 もちろんストレンジャー達も。」

「みたいだな。 ストレンジャー、その服は？」

フォックスもテイルス同様、服の事を聞いた。

「ああ、俺は前まで次期青竜の後継者だったんだけど、ついさっき、俺が本物の青竜になったんだ。」

「そうだったのか。」

「でもそうになると、それなりに何か仕事とかがあるのか？」

ナックルズはストレンジャーに問いかけた。

「まあ詳しくは言えないけど、一応な。」

「でもそうすると、ストレンジャーと、会えなくなっちゃうね。」

テイルスが顔を少しうつむかせて言った。

「テイルス」

ストレンジャーはテイルスの顔を見るためにテイルスの前へ行き、片膝を地面につけて言った。

「俺も、テイルス達と会えなくなるのは寂しいさ。でもな。」

ストレンジャーは膝を伸ばし、立ち上がって言った。

「会えなくても、どこかにいて元気にしていると思ってるだけでも、いいと思うんだ。 それだけでも、俺とテイルスと、つながっているってわかるから。」

「うん。 . . . そうだね。」

テイルスは笑顔で顔を上げた。

「また、会えるときでいいから、遊びに来てね。」

「ああ、また会いに行くよ。」

テイルスとストレンジャーは握手した。

「じゃあな、また会おうな。」

「うん！」

ストレンジャーは宝石たちと共に、元いた島へと帰っていった。

テイルスたちはストレンジャーを見送っていた。

ストレンジャーが島を去ると、暖かい春風が島に吹いていった。

「また会おうね、ストレンジャー・ザ・ドラゴン」

「また会おうな、マイルス・パワー」

そしてそれぞれでまた、別々の生活へと戻っていった。

ソニック達はいつもどおりの生活へ。

フォックスはコーネリアへ。

ストレンジャー達はテトラクリスタルアイランドへ。

でもコレだけは変わらずにいた。

『彼は彼の事を忘れずにいる事だけは』

変わらずに。

— E P I S O D E E N D —

侵略軍との攻防戦闘に勝利せよ！

<http://p.booklog.jp/book/88794>

著者：四神 夏菊

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lilysfia/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88794>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88794>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ